

『親当句集』出典考

岩 下 紀 之

連歌集の研究をするための最も基本的な作業は、句集を形成する各句がいかなる百韻、千句で詠まれたかを調査究明することであろう。各句の成立年代を確定し、前句の作者を明らかにし、句集採録にあたっての点削の有無を見る。

勅撰和歌集の研究ではとうに終了している基礎作業であるが、連歌ではこちらの方面がまだまだ不十分であった。百韻、千句の活字化が遅れていたこと、また、連歌集の付句の部に詞書がないことといった条件のもとではいたしかたもないところがあった。しかし、近年、年表形式による整理が進み、一方計算機による検索が我々にも手の届くものになりつつある。勢田勝郭氏による『竹林抄』の他出文献一覧は、このような地平に立った、従来の手作業とは異なる精度を備えたものとなっている。

本稿はこの勢田氏によるデータベースをふまえた試稿で

あって、『親当句集』の出典を調査したものであるが、今後は『新撰菟玖波集』までを視野におさめつつ、作業を継続してみたい。

—

蜷川智蘊出座の百韻千句と『親当句集』との共通句は、すでに石村雍子氏の『和歌連歌の研究』の中で調査され、計十五句あるむね指摘がある。本稿では、わずかに三句ほどの共通句を加えることができたのみであるが、その後百韻千句の整理が進んだことをもとに現状を見ておきたい。

まず、智蘊出座の連歌を列举しておこう。
千句は次の通り。

永享五年二月十一日 北野万句

文安二年冬

雪千句

百韻は、

永享十二年十月十五日

山河百韻

嘉吉三年十月二十三日

何木百韻

文安元年十月十二日

何船百韻

文安二年十月十八日

朝何百韻

文安四年五月二十九日

何船百韻

文安四年八月十五日

何路百韻

文安四年八月十九日

何人百韻

文安四年八月二十日

何人百韻

文安四年九月六日

山河百韻

文安五年二月五日

山河百韻

年時未詳のものとして、

梅なれや木の下やみの天津星、を発句とする、独吟何玉

百韻（天満宮文庫本）

九重も月のうちなる都かな、を発句とする独吟夕何百韻

（野坂本）

野山本）

撫子のおひさきこもる籬かな、を発句とする唐何百韻（高

に、

『連歌史論考』の連歌史年表文安五年条によれば、さら

吹け風花も紅葉も夏の庭、を発句とする、何路百韻が存
在するのであるが、未見である。

二

興行された順に、句集との共通句を記しておこう。

嘉吉三年十月二十三日何木百韻

以下百韻は、発句を一、上句を一〇〇として通し番号を付
して示すことにする。

四 木からしの風のおりくく吹て後 忍

四 冬されになる山のしたしは 静

四 椎の葉にかゝる藪はうち散て 当

句集には、

五〇七 木からしそよく山のした梨

五〇八 椎の葉にかゝるあられのうち散て

ここでは、もとの百韻の四一、四二を混合凝縮して、新し
い前句を創出してしている。そのために、新たに木枯しの吹き
しく景がみちびき出され、全体が動きのある自然描写に作
りなおされている。元の百韻の前句には、静的な場面設定
があるのみであるから、この修整は句集採録にあたっての、
智蘊の改作が成功したものと見えよう。この形で、『竹林抄』

(一二六九、一二七〇)と『新撰菟玖波集』(一一五四、一一五五)に入集している。なお、この『七賢時代連歌句集』の本の形の「した梨」は、した庵の誤植であろうか。この百韻からはこの一句を見出した。

文安二年雪千句

第二百韻発句

雪さそへ過行四つの時つかせ 智蘊
句集では、詞書「ある所にて」とあって、
雪さそへ過行よつの時津かせ

第八百韻

三七 七日にも袖はほされぬ塩くみて 能
三六 春はやくとやわかなつむらん 当
句集では、
三〇九 七日にも袂はほさぬしほくみて
二一〇 はるはやくとやわかなつむらむ

同じく、第十百韻

三九 なかれてはやき水そかすめる 竜
四〇 見るもうし鏡のそこの老の浪 当
句集では、

六七 はやく過ゆく水そかすめる

六八 みるもうしか、みのそこの老のなみ

以上、三句の共通句を見出した。同じ千句で、智蘊と親当と両方の名前であらわれるのは不思議なことであるが、事実として認めておくしかあるまい。これ以後の百韻でもそうになっている。句集採録にあたっては、少し手を加えたあとがあるものの、特に言及すべきほどでもないであろう。句集六一八の老の感慨も、智蘊の年齢の推定に役立つほどでもないが、文安二年段階にこう詠んでおかしくない年齢であったとは言えよう。

なお、『竹林抄』にはこの三句目の「みるもうし……」の句が含まれるのみで、その前の二句は収録されない。別に千句から

第三百韻

三九 しはしの月のあかつきのかげ 原
四〇 うしつらし老のね覚の秋の空 当
が『竹林抄』一〇五、一〇六に採られている。

第四百韻

四一 木たちよりちる蔦のした道 晟
四二 空くちのこるあかさひしきゆふかつら 当
は、句集と『竹林抄』にある
四五 葛葉をみるもあはれなりけり

五七 朽ちのこる神のいかきもさひしきに

〔竹林抄〕三〇三・三〇三

と類似するのであるが、前句付句が共に修整された場合、共通句と認定するのが難しい。結局共通句三句と、参考とすべき一句を見出したということになる。

文安四年八月十五日何路百韻

二 都そ秋は最中なりける

等運

三 朝霧を四方にめくれる山を見て

智蘊

句集では、

伊勢国司上洛の時一座侍りしに脇句は国司

三三 秋の最中そ都なりけると侍りし第三句

三四 あさ霧の四方にめくれるを山とみて

〔竹林抄〕六九・七〇

とあり、前句付句ともに少しずつ異同がある。脇の国司の句は、実は等運なる人物の代作であったのであろう。

三四 あとなしことになれるあらまし 忍

三五 かけ来しは夕の雲を契にて 親当

句集三五・五六で異同がない。〔竹林抄〕二四二・二四三

四 むなしきとこそなれる侘しさ 運

咒 葛城や山下ふしの花散て

当

句集は、

一四二 むなしき床を明るわひしき

一四三 かつらきの山したふしの花散て

それそれ小異がある。〔竹林抄〕三二・三三

宅 花はた、色も匂ひもさやかにて 忍

六 雪かと思れは残る白菊 向

六 水無瀬川今もはやくの秋の月 当

句集での形は次の通り。

三五 きくかとみれはのこるしら雪

三六 みなせ川いまもはやくの秋の月

〔竹林抄〕八五では、霜かと思れは残るしらきく、の形

で見えており、興味深い変動を示している。菊と水無瀬は

寄合であって替えられない。しかし、「残る白菊」と「残

る白雪」では、季節が違って来る。ここでは智蘊の意図的

な改作の痕跡を見ることができているのではないだろう

か。句集では前句は春季で、付句では秋に転換することに

なる。

なお、この百韻からの四句は、いずれも『竹林抄』にも

また採られているのだが、句形が微妙に異なっており、宗

祇が百韻と句集のどちらにもとづいているかは判然としな

い。

文安四年八月十九日 何人百韻

この百韻は名高い発句をはじめ、四句の共通句がある。
すなわち、発句

名もしらぬ小草花さく河辺哉

が、句集三、『竹林抄』三六、もちろん、『新撰菟玖波集』
にもあらわれる。

以下、

五 水のありては浪そ見へたる

早

五 入江なる尾花か本の朝氷

当

句集では

四六 水のあわとかなみそ見えたる

四六 入江なるおはなかもとのあさ氷

前句の異同はいかなものであろうか。写本で紛れやすい
文字の組み合わせなので、断定的な決論は下せないであろ
う。

五 まくさを運ふすこか帰るさ

喬

五 旅人やこの一むらにとまるらん

当

句集では六九・六〇で異同なし。

七〇 声たつるまで思ひ侘つ、

心

七 いたく迎忍ぶ妻戸をよもあけし

当

は、句集

五三 声たつるまでおもひわひぬる

五三 た、くとしてしのふ妻戸はよもあけし

これは小異ある。

文安四年八月二十日 何人百韻

三〇 語りなくさむ言の葉そうき

砌

三 葛城や入来し峯の道すから

当

句集に、

五五 かたりなくさむ老のかなしさ

五五 山ふしの入にし嶺の道すから

これは類似した句なのだが、前句付句ともにこの程度の異
なりがあると、出典とみなすべきかどうか、迷わざるを得
ない。

文安四年九月六日 山河百韻

五 恋しささそふ秋のはつかせ

心

五 ちるらめや我ふる郷のははそ原

当

句集は、

四三 恋しささそふ秋風そふく

四四 ちるらめや我かふる郷のは、そ原

と前句を修整している。句集と同じ形で『竹林抄』二〇五・
二〇六に採っている。

文安五年二月五日 山河百韻

この年は智蘊死去の年で、知られるかぎり彼の出座した最後の連歌である。

三 野はらのあらし露碎く声 忍

三〇 ふる郷の身をしる雨に花落て 当

句集では

一四七 野はらのあらし露くたくなり

一四八 ふる郷の身をしる雨に花おちて

前句の「碎く声」を「くたくなり」に修整。『竹林抄』三六五

・三六には百韻の形で入集。

また、

三六 あらはれ出る中はうらめし 貞

三七 人の身に添し玉しむかへりこて 当

句集

三三〇 あらはれいつる中そかなしき

三六一 人の身にそへし玉しむ帰りこて

ここも「うらめし」を「かなしき」に変えている。

句集とは別に、この百韻の三・三三の句が『竹林抄』『新撰菟玖波集』に採られている。

年時未詳の、「撫子のおひさきこもる離かな」を発句とする百韻からは、この発句が句集三五六に同形で入っているほか、次の共通句を見出した。

三五 影をたにうつさむ瀬々の涙川 忍
三六 なとみなかみの紅葉散らん 当

句集では、

四四五 色にさへあさくはみえぬ涙川

四五六 なにみなかみのもみちるらん

と見えている。ここでは前句の「影」を「色」に変えることによって、色彩感をより鮮明ならしめているのであろう。

百韻では、さらにその前の句が、

四六 かはすとみつる夢のことの葉 砌

というので、それに付けた忍(誓)は、影という語に相手の姿という意味を込めている。つまり恋の句としてはた

らきを充分發揮している。智蘊は付句の秋季を効果的にするために、紅葉の色彩感のほうに引きつける修整を試みたのであろう。

三七 あれはあひけり年々の春 砌

三六 またさりき老の末野の花盛 当

これが句集では、

三三二 あれはそあへる年々の春

三三三 またさりし老の末野の花さかり

と小さな修整を加えている。この句は『竹林抄』三四・三四にも入集するが、句形はどちらとも一致しない。

三四

三四

三四

三四

三四

三四

最後に参考として一句あげておきたい。永享九年三月廿一日の北野万句第一山何連歌に、次の句がある。

弄 いつまでかひとりねよとは思ふらむ 藤原元康

六 まちよはれとて月そかたふく

泉阿

句集に、

三二 今夜又いたつらふしに明やせむ

三三 まちよはれとて月そかたふく

という句がある。前句が全く異なっており、付句の作者も異なっている。泉阿が智蘊の別名との可能性は考慮にとどめておきたいが、今のところ偶然の一致と考えるしかあるまい。

三

以上『親当句集』と百韻千句の共通句、見当つたかぎりをあげてみた。筆者として、指摘しえたもの十八句、修整の度合いが大きく断定をひかえたいもの二句、偶然の一致と見なすべきもの一句である。大きな修整を加えずに句集に採録したものが多くようであるが、稀に修整の意図への想像を許す例もあった。

なお採録された百韻千句は嘉吉三年から文安五年まで、約五年であったが、この時期の作品の残存率が低いことで、

より多くの資料の出現が待たれる。『親当句集』が自撰であろうとの推定は『七賢時代連歌句集』の編者の御見解で妥当なものと思うが、死去する年の成立であることが裏づけられたと考へる。

『竹林抄』の採録にあたっては、この句集は直接の対象となっていないようである。原懐紙ないし、他の句集を参照していた形跡は明らかで、句形や、百韻からの入集など、『親当句集』とは何個所もくいちがいがいがある。

注：本稿では『親当句集』は『七賢時代連歌句集』本を用いている。

『竹林抄』の番号は『校本竹林抄』によっている。岩波書店の新大系本の番号づけは、本稿の作業に時間的に利用できなかったが、付載の他出文献一覧に大きな恩恵をこうむった。